

日本語学習者の助詞・動詞選択の傾向：自動詞他動詞の比較を中心に

著者	沖本 与子
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	4
ページ	51-65
発行年	2019
URL	http://doi.org/10.15084/00002554

日本語学習者の助詞・動詞選択の傾向

—自動詞他動詞の比較を中心に—

沖本 与子(一橋大学大学院言語社会研究科)

Tendencies of Particles and Verbs Choices from the Japanese Language

Learners: Comparison of Intransitive and Transitive Verbs

Tomoko Okimoto (Hitotsubashi University Graduate School of Language and Society)

要旨

本研究は、助詞と動詞を組み合わせた問題文における学習者の助詞選択と動詞選択の傾向を自動詞他動詞の比較を中心に分析し、日本語学習者の回答特徴を把握することを目的とする。使用した言語資源は、松下(2011)「日本語を読むための語彙データベース(VDRJ)」と日本語学習辞書支援グループ(2015)「日本語教育語彙表 Ver 1.0」である。この言語資源から動詞を抽出しテストを作成し、初級前半終了～中級後半終了の日本語学習者から延べ137名の回答データを収集した。

回答データ分析の結果、各テストの平均正答率では大きな差は見られなかった。また、初級レベルはひらがなのみで出題したため、非漢字圏学習者の平均点が高い問題があり、中級レベルは漢字を使用し出題したため、全体的に漢字圏学習者の平均点が高かった。なお、対のある自他動詞の問題において、「を」を「が」と誤回答する率が高く、同様に、全ての動詞において自動詞より他動詞の方が回答において正答率が高かったことが分かった。日本語学習者の回答傾向を分析することで、特に自他動詞の教育実践への応用が期待できる。

キーワード：自動詞・他動詞，対のある自他動詞，助詞と動詞の組み合わせ，
オンラインテスト

1. はじめに

日本語学習者にとって、語彙を増やすことは重要であり、特に基本動詞を覚えることは、産出の手助けとなる。ただし、短い単文の産出であっても、助詞と動詞の組み合わせについてはコロケーションとしてまとめて習得しておかなければ、誤用が散見される。

- (1) a. 妹はときどきばんごはんが(→を)作ります。
- b. 反対意見が大半に(→を)占めた。

(1)a.は初級レベルの学習者の、(1)b.は中級レベルの単文産出から抜粋したものであり、両文とも格助詞の使用に関する誤用である。また、動詞のみに限定した場合、日本語の対のある自動詞と他動詞の使い分けは日本語学習者にとって、習得しにくい項目の一つと考えられる。

- (2) a. 今日は、じこででん車がとめました (→とまりました)。
 b. 1991年に、山でアイスマンを見つけた (→見つけた)。

(2)a.は自動詞(止まる)を用いるべき文章で、対の他動詞(止める)を用いたもので、(2)b.は他動詞(見つける)を用いるべき文章で、対の自動詞(見つかる)を用いた例である。

このような例から日本語学習者が誤用しやすい助詞について、または使い分けにくい自他動詞について、本研究では次の三つの研究課題を量的なデータを用いて明らかにすることを目的とした。

研究課題1：自動詞と他動詞は難易度のレベルを変えるとその正答率に影響があるか

研究課題2：対のある自他動詞と対のない自他動詞では、正答率に特定の傾向があるか

研究課題3：学習者の助詞選択は自動詞と他動詞の正答率に影響を与えるか

また、本研究では、これらの課題を調査し、その結果から特に自他動詞の教育実践への応用についても考察を行った。なお、本研究で使用した言語資源は以下の通りである。

- 1) 松下達彦 (2011) 日本語を読むための語彙データベース (VDRJ) Ver. 1.1¹
- 2) 日本語学習辞書支援グループ (2015) 「日本語教育語彙表 Ver 1.0」²

2. 問題作成について

まず、「日本語を読むための語彙データベース (以下、VDRJ) (松下 2011) と「日本語教育語彙表 Ver 1.0」(日本語学習辞書支援グループ 2015) から動詞を抽出し、それぞれの動詞を同定し、リスト作成した。この作成したリストに、『みんなの日本語初級 I・II』と『初級日本語げんき I・II』で使用されている動詞を加え同定した。なお、「～する」(例：掃除する、電話する、など)は今回のリストから削除した。また、『新明解国語辞典第六版』(2005)を用いて全ての動詞に自動詞・他動詞のタグ付けをした。「流れる」「流す」のように対となる自動詞・他動詞については、本稿では「対のある自他動詞」と呼ぶ。これらの対のある自他動詞については、早津 (1995) の有対自他動詞対のリストと新明解国語辞典での自他動詞の定義に倣った。なお、対のある自他動詞については、調査参加者の教科書を用いた学習歴を考慮し、中石 (2003) で指摘があるように語幹を共有していない対「入る (hairu)・入れる (ireru)」も含めたが、早津 (1987) でも述べられているように意義的・統語的には対応関係が成り立つが、形態的な対応を欠いている自動詞「死ぬ」と他動詞「殺す」、自動詞「できる」と他動詞「作る」は対のある自他動詞には含めなかった³。

次に、各動詞に対し単文を作成し、「日本語の多義動詞」(国広 2006)を参考に、主要な用法が複数ある場合は、1つの動詞に対して複数の単文を追加した。

- 例：焼く ①ともだちは まいしゅう パンを やきます。(初級④_No.47)
 ②データを CD に やきます。(初級④_No.49)

¹ <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/database.html>

² <http://jisho.jpn.org/>

³ 本研究で使用した「対のある自他動詞」は、本稿末に資料として一覧を掲載した。

最終的に初級 261 語、中級 331 語を用いた 592 問の単文を作成した。なお、今回のテスト用問題作成では、助詞と動詞の組み合わせ選択をターゲットとしたため、主要な助詞（は・が・を・に・へ・で・の）のみを対象とし、「から」「より」は使用していない。

その後、問題文を初級・中級に分けたが、テストを受ける学習者の負担を考慮し、それぞれ 5 グループに分けることで 1 つのテストの問題数を減らし、合計 10 個のテストを作成した。なお、自動詞・他動詞で対があるもの（例：落ちる・落とす）は所属するレベルの各テストに同数になるよう振り分けたが、初級と中級の両方にまたがる自動詞・他動詞対（46 個：23 対）は、初級へ 11 対、中級へ 12 対振り分けることにした。同時に、初級への負担を減らすことを目的とし、VDRJ でラベル付けしてある旧 JLPT で 4 を初級用に優先的に選び、旧 JLPT 3 でも Word Ranking for International Students で早い番号に出てくるものを初級用を選択した。

最終的にできたテスト問題数は以下の通りであり、初級は問題文をひらがなにし、選択肢の動詞を「ます形」に、中級は問題文に漢字を用い、選択肢の動詞を「普通形」に変更した。これらのテストをオンライン (SurveyMonkey) に載せ、調査参加者がアクセスできるようにした。

初級 ①：53 問、②：52 問、③：52 問、④：52 問、⑤：52 問
 中級 ①：67 問、②：66 問、③：64 問、④：67 問、⑤：67 問

なお、出題した問題例は以下の通りである。学習者への指示文は全てのテストに共通で、日本語・英語・中国語で「() 内に当てはまる適切な助詞と動詞の組み合わせを選ぶこと」と示した。

問題例 1：にほんごの せいせき () ()。(初級①テストより)

- ① が あがりました
- ② を あがりました
- ③ に あがりました
- ④ へ あがりました

問題例 2：銀行にお金 () ()。(中級①テストより)

- ① が 預ける
- ② を 預ける
- ③ に 預ける
- ④ へ 預ける

3. 先行研究

日本語の自動詞と他動詞の使い分けは日本語学習者にとって、習得しにくい項目の一つであるが、自他動詞の習得が難しい原因は日本語における自動詞の難しさにあることが挙げられる。守屋 (1994) は中国語・韓国語・英語母語話者を対象に、自他動詞のテストを実施し、日本語の自動詞と他動詞の選択基準を探った。その結果、特に中国語と英語母語話者にとって、自他動詞の選択の難しさは自動詞選択の難しさにあると結論付けた。また李 (2008) は中国語母語話者を対象に作文とフォローアップインタビューを実施し、語彙習得

の難しさの原因を探った。その結果、自他動詞の習得の難しさは、自動詞及び自動詞文にあると結論付けた。

これらの先行研究は、寺村(1982)の相対自動詞、相対他動詞に見られる「割れる・割る」の「war-」,「建つ・建てる」の「tat-」のように語幹を共有する形態的対を指すものや、早津(1987)の有対自動詞、有対他動詞に見られる意味的、統語的にも対応するものに代表されるように、対を持つ自他動詞を扱っている。対を持つ自他動詞は特に学習者にとって習得、使い分けともに難しい項目であり、中石(2003)に見られるように多くの研究論文における自動詞・他動詞の研究が、対のある自動詞・他動詞(例:割れる・割る)の使用、および習得状況について行われるのは当然である。しかし、動詞には対のある自動詞・他動詞と対のない自動詞・他動詞があるが、それに対する学習者の回答についての比較を行っている研究論文は管見の限り見られない。

同様に、助詞は助詞そのものの機能的役割などについて、動詞は動詞の活用指導などについての研究が多くされている。しかし、助詞と動詞の組み合わせについては、奥田(1983)の格助詞とその係り受け関係にある名詞と動詞に関する研究、田辺・吉村・首藤(2008)の「に格」の深層格確認のために係り受けの名詞と述部の組み合わせに関する研究、CHAUHAN(2018)の助詞選択と動詞選択に関する誤用を元に学習者の対のある自他動詞の習得に関する研究に見られるように数は少ない。また、学習者習者の助詞と動詞の組み合わせに関する回答傾向を探った研究は見られなかった。

4. 調査について

- 1) 調査時期: 2019年4月17日(水)~5月31日(金)
- 2) 調査場所: 都内某私立大学
- 3) 調査対象者: 初級前半終了~中級後半終了の学習者
- 4) 調査レベル: レベル判定は調査教育機関での該当レベルクラス, JLPT(受験者のみ), J-CAT(受験者のみ)を元にした
- 5) 調査内容: 初級前半と初級後半を終了した日本語学習者は、初級テスト(①~⑤)から2つ受験し、中級前半と中級後半を終了した日本語学習者は、中級テスト(①~⑤)から2つ受験した。受験はクラスごとにランダムに振り分け、調査に同意した希望者が受験した。
- 6) 調査参加者: 実調査者参加者数は69名、延べ137名が調査に協力し(1テストしか受験しなかった学習者が1名)、5名無回答であったため、132名分のデータを取得した。
- 7) 各テストの回答者数:(無回答者は外す)

テスト名	回答者数
初級①	13人
初級②	11人
初級③	10人
初級④	18人
初級⑤	19人

テスト名	回答者数
中級①	17人
中級②	12人
中級③	7人
中級④	9人
中級⑤	16人

5. 結果分析

5.1 全体の結果

まず、学習者全員の得点を100点満点に換算し、全てのテストをまとめて分析を行った。図1はヒストグラムを作成したものである。中央値は68.70、平均値は69.08であり、コルモゴロフ・スミルノフ検定（以下KS検定）を行った結果、 $p = 0.25$ で正規分布と仮定してもよいと考えられる。

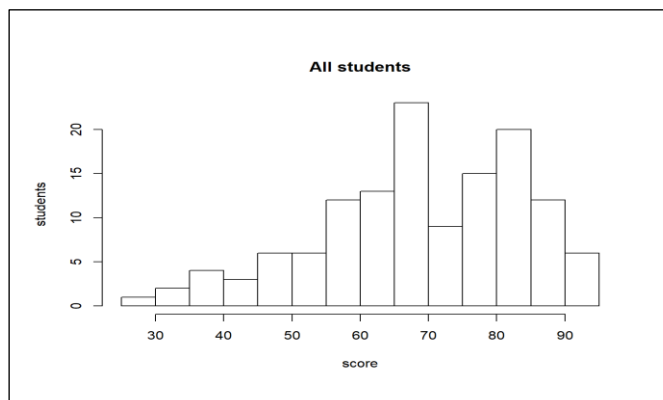


図1 全学習者の得点（100点換算）

5.2 初級・中級レベルに分けての分析

次に、初級レベルと中級レベルを分けて、分析をした。図2はそれぞれのヒストグラムである。初級レベルのグループの中央値は71.15、平均値は70.12であり、KS検定の結果は $p = 0.1$ で正規分布と仮定してもよいと考えられる。また、初級各テストにおける成績を確認するために、一元配置分散分析を行った結果、有意差はなかった ($F(4, 66) = 0.62, p > 0.05$)。

続いて、中級レベルの中央値は68.66、平均値は67.87であり、KS検定の結果は $p = 0.75$ で正規分布と仮定してもよいと考えられる。また中級レベルでの一元配置分散分析の結果、有意差はなかった ($F(4, 56) = 0.01, p > 0.05$)。

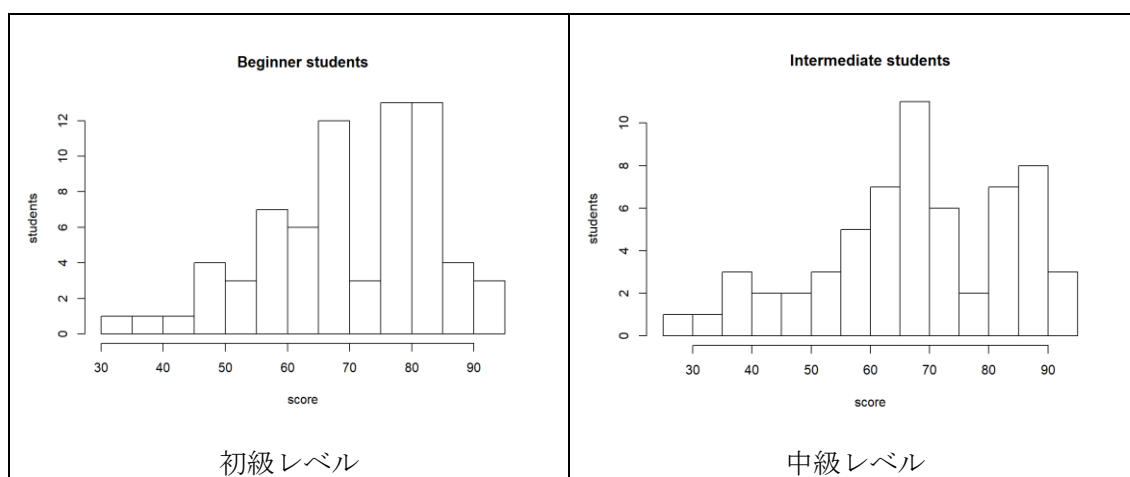


図2 初級レベルと中級レベルの得点（100点換算）

5.3 各テストの正答率の平均点と標準偏差

表1はテスト初級①～⑤・中級①～⑤の正答率の平均点 (Avg.) と標準偏差 (SD) をまと

めたものである。正答率の平均点は全て68%~75%であり標準偏差が0.43~0.47であった。どちらもほぼ同数のため、全てのテストにおいて差がないと考えられる。

なお、図3は初級レベルと中級レベルのそれぞれのテストごとにプロットした箱ひげ図である。

表1 テスト初級①~⑤・中級①~⑤の正答率平均点 (Avg.%) と標準偏差 (SD)

テスト名	Avg.(%)	SD	テスト名	Avg.(%)	SD
初級①	71.12	0.454	中級①	68.22	0.466
初級②	75.35	0.431	中級②	67.89	0.467
初級③	68.46	0.465	中級③	68.08	0.467
初級④	69.66	0.460	中級④	66.83	0.471
初級⑤	67.71	0.468	中級⑤	67.97	0.467

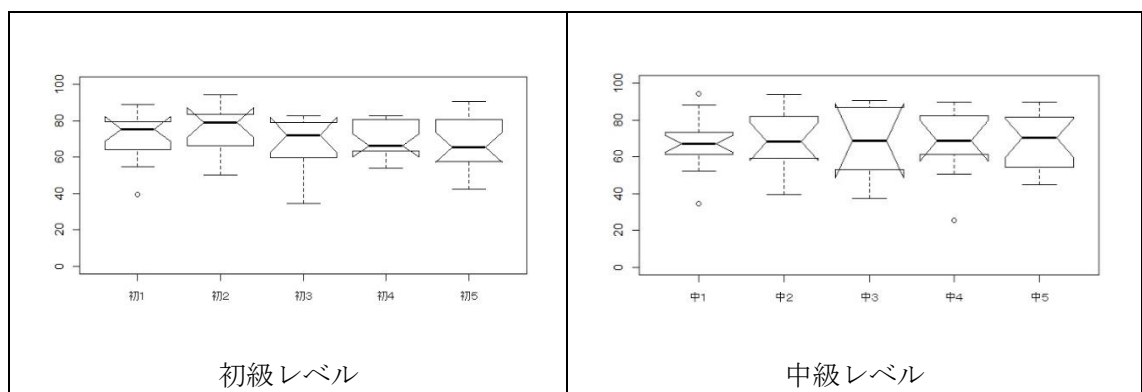


図3 初級レベルと中級レベルのテストごとの箱ひげ図

5.4 母語別の分析

続いて、参加した学習者の母語を漢字圏と非漢字圏に分け分析を行い、表2にまとめた。

初級テスト①を受験した学習者のうち、中国語母語話者を漢字圏の学習者とし、「初①_漢(初級テスト①, 漢字圏学習者)」と名付けた。また、初級テスト①を受験した学習者のうち、他言語母語話者(英語・韓国語・タイ語・ノルウェー語など)を非漢字圏の学習者とし、「初①_非漢(初級テスト①, 非漢字圏学習者)」と名付けた。以下、初級②~中級⑤まで同様とする。

今回のテストは初級レベルのテスト①~⑤はすべてひらがなで出題しているため、学習者の日本語知識のみが確認できている。そのため、テスト①~⑤では、非漢字圏の学習者の平均点が高いテスト(初級②, 初級④, 初級⑤)がある。一方、中級のテストは漢字を使用し出題しているため、全体的に漢字圏の学習者の平均点が高い結果が得られた。以上のことから、中級のテストの漢字にルビを振り、漢字の読みが理解できれば、非漢字圏の学習者の平均点が伸びる可能性が考えられる。

なお、中級テスト③と中級テスト④で漢字圏と非漢字圏の平均点が大きく異なっているのは、両テストにおける非漢字圏の学習者がどちらも2名のみであり、低得点が直接反映されているためである。

表2 漢字圏と非漢字圏の正答率の平均 (Avg.%) と標準偏差(SD)

テスト&母語別	Avg. (%)	SD	テスト&母語別	Avg. (%)	SD
初①_漢	72.88	0.445	中①_漢	72.31	0.448
初①_非漢	68.30	0.466	中①_非漢	63.62	0.482
初②_漢	72.12	0.449	中②_漢	74.68	0.435
初②_非漢	83.97	0.368	中②_非漢	61.11	0.488
初③_漢	70.05	0.459	中③_漢	82.42	0.381
初③_非漢	64.74	0.479	中③_非漢	<u>48.96</u>	0.501
初④_漢	66.76	0.471	中④_漢	75.05	0.433
初④_非漢	79.81	0.402	中④_非漢	<u>38.06</u>	0.487
初⑤_漢	64.97	0.477	中⑤_漢	73.97	0.439
初⑤_非漢	75.38	0.432	中⑤_非漢	50.00	0.501

5.5 動詞を中心とした分析結果

5.5.1 自動詞と他動詞の比較

本研究で使用した動詞は 592 語であり、その自他の内訳は、自他同形 (19 語)、自動詞 (242 語)、他動詞 (331 語) である。これらの動詞の平均正答率を分析した結果、全ての自動詞から作成された問題の平均正答率は 64.02% であり、全ての他動詞から作成された問題の平均正答率は 72.32% であった。なお、自他同形の 19 語から作られた問題は分析から外している。全問題において、自動詞と他動詞では他動詞の方が平均正答率が高くなる。

続いて、これらの自動詞と他動詞をそれぞれ「対のある自他動詞 (例: 落ちる・落とす, など)」と「対のない自他動詞」で分けた場合、以下の表 3 の集計となる。

表3 自動詞・他動詞における平均正答率及び問題数

	全問題の平均正答率	対のある自他	対のない自他
自動詞	64.02% (242 問)	63.37% (77 問)	64.54% (165 問)
他動詞	72.08% (331 問)	70.30% (79 問)	73.18% (252 問)

以上のことから、対のあるなしに関わらず、他動詞の平均正答率が高いことが確認された。また、対がない他動詞は問題数が最も多いが、平均正答率も最も高いことが分かる。つまり、学習者にとって、自動詞より他動詞の方がより習得しやすい語であることが推測される。

5.5.2 初中級レベルにまたがる自他動詞の分析

次に初中級レベルにまたがって出題されている自動詞・他動詞対のみを取り出して分析した。表 4 は動詞の元のレベル (表の「動詞レベル」)、出題されたテストレベル (表の「テストレベル」)、語数とその例をまとめた。例えば、動詞の「移す」「残す」などは本来中級レベル (表の「動詞レベル」) だが、ペアになる動詞「移る」「残る」が初級レベルのため、テストでは初級レベルに入れて出題した (表の「テストレベル」)。

表4 テストレベル・動詞レベルについての内訳

テストレベル	動詞のレベル	自他の区別	語数	例
初級	中級	他動詞	8語	移す, 残す
初級	中級	自動詞	3語	取れる, 切れる
中級	初級	他動詞	4語	育てる, 届ける
中級	初級	自動詞	8語	倒れる, 戻る

まずは全ての対のある自他動詞について、各レベルで出題された際の平均正答率を以下の表にまとめた。

表5 全ての対のある自他動詞の各レベルでの平均正答率

	自動詞	他動詞
初級レベルでの出題	59.93%	67.31%
中級レベルでの出題	70.73%	75.29%

その後、初級レベルに出題された中級レベルの自他動詞、中級レベルに出題された初級レベルの自他動詞、初級レベルに出題された初級レベルの自他動詞、中級レベルに出題された中級レベルの自他動詞の平均正答率をまとめた。

表6 各レベルにおける自他動詞の平均正答率

	初級の自動詞	初級他動詞	中級の自動詞	中級他動詞
初級レベル	71.72%	70.90%	36.32%	65.15%
中級レベル	72.62%	91.74%	67.41%	67.07%

表5に見られるように、対となる自動詞と他動詞全てを比較すると、全動詞を確認した場合と同様に、自動詞の方が平均正答率が低くなる。特に表6にあるように、初級に中級レベルの自動詞問題を入れた場合、36.32%と平均正答率が下がった。初級レベルの学習者にとって未習得と考えられる中級レベル自動詞は、例え同じテスト内に対となる、つまりヒントとなる他動詞があったとしても、正確に回答することが難しいことがうかがえる。

5.5.3 学習者ごとの対のある自他動詞の正答率

次に、学習者に焦点を当て、対のある自他動詞の正答率について分析をした。各学習者の正答率について、他動詞正答率を自動詞正答率で割った場合とその反対を用意した。基準値として仮に1.5を目安に集計したところ、「自動詞より他動詞の正答率が高かった学習者」が26人、「他動詞より自動詞の正答率が高かった学習者」が8人であった(表7)。

この中で、特に「自動詞より他動詞の正答率が高かった学習者26人」に注目し、正答率が高かった他動詞についてどのような動詞なのか、何らかの特徴があるのか、について確認をした。

初級テストで出題された例：落とす, 聞く, 出す, 並べる, 止める

中級テストで出題された例：温める, 付ける*, 伝える*, 解く, 戻す

中級テストで出題された動詞に「*」を付けているが、これらの動詞は元が初級レベルであるが、中級レベルのテストで出題されているものである。

正答率の高かった他動詞は基本的に初級前半で習得し、かつ学習者にとって使用頻度の高い動詞であることが分かった。また、中級レベルのテストでは、初級レベルだが中級レベルのテストに出題されている、いわゆる「初級他動詞」が一定数含まれていることが分かった。つまり、学習者にとって、初期に学習し繰り返し使う動詞の定着が高いことが伺える。

表7 他動詞の平均正答率が自動詞より高い学習者（例）

学習者	自動詞の 正答率	他動詞の 正答率	自<他	自>他
S1	18.18	66.67	3.67	0.27
S2	25.00	77.78	3.11	0.32
S3	30.77	90.00	2.93	0.34
S4	33.33	88.89	2.67	0.38
S23	38.46	60.00	1.56	0.64
S24	50.00	77.78	1.56	0.64
S25	50.00	77.78	1.56	0.64
S26	46.15	70.00	1.52	0.66

5.6 助詞を中心とした分析結果

今回の調査で使用したテストは助詞と動詞の組み合わせを問う問題を用意したため、学習者の助詞選択から、次に述べる分析結果が得られた。なお、使用した助詞は全問題の選択肢において、できるだけ同数になるように用意した。問題 592 問中、選択肢 1 では「が」を 578 回、選択肢 2 では「を」を 587 回、選択肢 3 では「に」を 565 回、選択肢 4 では「へ」を 500 回（選択肢 4 ではその他、「で」を 32 回、「と」を 43 回、「の」を 13 回）を使用した。なお、使用したオンラインテスト（SurveyMonkey）では問題は予め決めてある番号順に、選択肢は自動的に混ぜて、学習者から見るとランダムに表示されるように設定してある。

5.6.1 「を格」と動詞の組み合わせについて

「を」を正答とした問題は 592 問中 328 問あり、それらに対する学習者の正答率と、間違えた学習者が不正解として選んだ他の助詞の比率をまとめた（表 8）

表8 「を格」を含む問題における助詞の解答数と比率

	「を」	「が」	「で」	「に」	「へ」	「の」	合計
初級	1421(75%)	299(16%)	8(0%)	157(8%)	17(1%)	1(0%)	1902
中級	1708(71%)	347(15%)	0(0%)	295(12%)	42(2%)	0(0%)	2392
合計	3129	646	8	452	59	1	4294

「を」を正答とする問題では、「が」を誤答として選んだ比率が初級 16%、中級 15%と他の選択肢と比べても高いことから、学習者は動詞に対する組み合わせとして「を」と「が」の選択で間違いやすいことが推測できる。

5.6.2 「を格」と対のある自動詞・他動詞の組み合わせについて

続いて「を」を正答とする問題の中から、対のある自他動詞の中で他動詞に注目し、それぞれの助詞の解答数と比率をまとめた。なお、「を」を正答する問題の中で対のある他動詞の問題は 87 問である。

問題例：へやの でんき () ()。 (初級②_No.30)

選択肢：1 が つけます 2 を つけます 3 に つけます 4 で つけます

表9 「を格」を含む問題での対のある他動詞における助詞の解答数と比率

	「を」	「が」	「で」	「に」	「へ」	「の」	合計
初級	415(80%)	79(15%)	0(0%)	23(4%)	4(1%)	0(0%)	521
中級	412(68%)	125(21%)	0(0%)	61(10%)	7(1%)	0(0%)	605
合計	827	204	0	84	11	0	1126

対のある他動詞のみをまとめると、「が」を誤答として選んだ比率が上がり、初級が 15%、中級が 21%になった。このことから、学習者は対のある自他動詞の中の他動詞への回答で、助詞を混乱しやすいことが推測できる。

また、「を」を正答する問題の中で対のある自動詞の問題は、14 問ある。表 10 に初級と中級に分けて、それぞれの助詞の解答数と比率をまとめた。

問題例：田中さんは来月、社長の座 () ()。 (中級④_No.25)

選択肢：1 が 退く 2 を 退く 3 に 退く 4 へ 退く

表10 「を格」を含む問題での対のある自動詞グループにおける助詞の解答数と比率

	「を」	「が」	「で」	「に」	「へ」	「の」	合計
初級	49(52%)	18(19%)	0(0%)	24(25%)	4(4%)	0(0%)	95
中級	42(47%)	20(22%)	0(0%)	25(28%)	2(2%)	0(0%)	89
合計	91	38	0	49	6	0	184

「を」を正答とする対のある自動詞の問題は 14 問と少ないので、参考程度ではあるが、「が」を誤答として選んだ比率はさらに上がり、初級が 19%、中級が 22%となった。学習者が動詞を「を」または「が」と結びつきがあると認識した場合は、助詞に「が」を選ぶ可能性が高くなることが推測される。

5.6.3 「を格」と対のない自他動詞の組み合わせについて

次に「を」を正答とした問題の中から、対のある自他動詞以外の動詞（対のない自他動詞 227 問）を取り出し、初級と中級に分けて、解答として選んだそれぞれの助詞の解答数と比率を表 11 にまとめた。

表 11 「を格」を含む問題での対のない自他動詞における助詞の解答数と比率

	「を」	「が」	「で」	「に」	「へ」	「の」	合計
初級	957(74%)	202(16%)	8(1%)	110(9%)	9(1%)	1(0%)	1287
中級	1254(74%)	202(12%)	0(0%)	209(12%)	33(2%)	0(0%)	1698
合計	2211	404	8	319	42	1	2985

「を」を正答とした全問題から、対のある自他動詞を除くと、対のない自他動詞の問題では、「が」を誤答として選ぶ比率が下がる（初級 16%・中級 12%）。つまり、今回のテストに参加した日本語学習者は特に、対のある自他動詞の選択問題で「を」と「が」の使用において混乱する可能性があったことが分かる。

6. まとめ

本研究では、自作のオンラインテストの結果を用いて、自動詞・他動詞の比較を中心に、日本語学習者の助詞・動詞選択の傾向を考察した。全体を通して、自動詞を用いた問題項目に対する正答率の低さから、自動詞の習得が難しいことが推測され、先行研究で指摘されている内容が改めて確認できたと言える。また漢字圏学習者と非漢字圏学習者の比較を行った際に、問題文をひらがなで提示すれば、非漢字圏学習者の日本語能力そのものを測ることができることも確認できた。

本研究の研究課題 3 点について以下にまとめる。研究課題 1 「自他動詞はレベルを変えると正答率に影響があるか」については、全般的に自動詞の方が平均正答率が低くなるのが分かり、特に初級に中級レベルの自動詞問題を入れた場合、36.32%と平均正答率が下がった。初級レベルで中級レベルの自動詞に答えることは、未習得であると同時に、同じテスト内に対となる他動詞があっても正確に回答することが難しいことがうかがえる。また、対のある自他動詞は基本的に同じレベルに属することが多いことから、レベルをまたがる対のある自他動詞は数が限られる。そのため、初級レベルで中級レベルに属する対となる自動詞（または他動詞）を導入・紹介することは学習者にとって大きな負担ではないことが提案できるのではないだろうか。

研究課題 2 「対のある自他動詞と対のない自他動詞では、正答率に特定の傾向があるのか」については、まず、対のあるなしに関わらず、他動詞の平均正答率が高いことが確認された。ただし、対のない他動詞は問題数が最も多いが、平均正答率も最も高いことが分かった。学習者にとって、自動詞より他動詞の方がより習得しやすい語であることが推測されると同時に、習得が難しいと考えられる対のある自他動詞の自動詞は特に注意を向けて教授し、学習者が繰り返し触れる機会を設けることで、習得が高まるのではないだろうか。

研究課題 3 「助詞選択は自他動詞の正答率に影響を与えるのか」については、「を」を正答とする問題では、「が」を誤答として選んだ比率が初級 16%・中級 15%となることから、「を」と「が」の選択で学習者が間違えやすいことが分かった。特に対のある自他動詞を、

自動詞・他動詞別に正答率を確認すると、他動詞で初級 15%・中級 21%、自動詞で初級 19%・中級 22%と誤答の率が上昇する。一方で対のない自他動詞は初級 16%・中級 12%と誤答率が下がることから、特に初級学習者に学習において助詞と動詞の組み合わせに注目させることと、対のある自他動詞では助詞と自動詞の組み合わせに重点をおいて指導することにより、学習者の習得が促進できるのではないであろうか。

7. 今後の課題

本研究では、対のある自他動詞の中の自動詞において、学習者の平均正答率の低さから、自動詞の習得が難しいことが先行研究の通りに確認できた。同時に、対のない自他動詞の他動詞について、学習者の習得が高いことも観察できた。本研究では、基本的に所属するレベルで自他動詞を出題したため、対のある自他動詞で初中級にまたがって主題された項目数が少ない。レベルをまたがり対のある自他動詞を一定数入れて再調査を行うことも今後の課題である。また今後は、問題の精査を行い学習者にとって負担のない問題数でテストを作り直し、助詞と動詞の組み合わせ確認テストとして使用できるよう整備する。

謝辞

本研究は、早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号 2019E-099）による研究成果の一部である。

参考文献

- 奥田靖雄（1983）「に格の名詞と動詞のくみあわせ」言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房 pp.281-323.
- 国広哲弥（2006）『日本語の多義動詞 理想の国語辞典II』大修館書店。
『初級日本語 げんき I 【第2版】』（2011）The Japan Times.
『初級日本語 げんき II 【第2版】』（2011）The Japan Times.
- 田辺利文・吉村賢治・首藤公昭（2008）「格助詞「に」の深層格推定--格助詞の意味再考」『情報処理学会研究報告』 pp65-72.
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 中石ゆうこ（2003）「対のある自動詞・他動詞の習得研究の動向と今後の課題」、『広島大学大学院教育学研究科紀要』 52, pp.167-174, 広島大学
- 日本語学習辞書支援グループ（2015）「日本語教育語彙表 Ver 1.0」<<http://jisho.jpn.org/>>, 2018年8月アクセス
- 早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』 6号, pp.79-109. 京都大学
- 早津恵美子（1995）「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」須賀一好・早津恵美子（編）『動詞の自他』ひつじ書房 pp.179-197.
- 松下達彦（2011）「日本語を読むための語彙データベース（VDRJ） Ver. 1.1」, <<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/database.html>>, 2018年8月アクセス
『みんなの日本語初級I 第2版 本冊』（2012）スリーエーネットワーク。
『みんなの日本語初級II 第2版 本冊』（2013）スリーエーネットワーク。
- 守屋三千代（1994）「日本語の自動詞・他動詞の選択条件—習得状況の分析を参考に—」『講座日本語教育』 29号, pp.151-165.

山田忠雄編（2005）『新明解国語辞典第六版』三省堂.

李萍（2008）「中国における日本語学習者の相対自・他動詞の習得状況—より効果的な指導法の模索を目的として—」『國學院大學紀要』46号, pp.221-245.

CHAUHAN, Anubhuti（2018）「ヒンディー語を母語とする日本語学習者における対のある自他動詞の習得について—助詞選択と術後洗濯に関する誤用を中心に—」『日本語教育』170号, pp.47-61

資料

以下に本研究で使用した対のある自他動詞のリストを載せる。

表内の「元のレベル」はその動詞のオリジナルのレベルであり、「初」は初級、「中」は中級を表す。「出題レベル」は本研究で使用したテストで出題したレベルであり、グレーを付けている動詞はオリジナルのレベルと出題レベルが異なる動詞である。

番号	動詞	自他	元のレベル	出題レベル
1	上がる	Vi	初	初
2	上げる	Vt	初	初
3	当たる	Vi	中	中
4	当てる	Vt	中	中
5	集まる	Vi	初	初
6	集める	Vt	初	初
7	入れる	Vt	初	初
8	入る	Vi	初	初
9	浮かぶ	Vi	中	中
10	浮かべる	Vt	中	中
11	動かす	Vt	中	中
12	動く	Vi	初	中
13	移す	Vt	中	初
14	移る	Vi	初	初
15	終わる	Vt	中	初
16	終わる	Vi	初	初
17	起きる	Vi	初	初
18	起こす	Vt	初	初
19	落ちる	Vi	初	初
20	落とす	Vt	初	初
21	折る	Vt	初	初
22	折れる	Vi	初	初

番号	動詞	自他	元のレベル	出題レベル
77	潰す	Vt	中	中
78	潰れる	Vi	中	中
79	詰まる	Vi	中	中
80	詰める	Vt	中	中
81	通す	Vt	中	中
82	通る	Vi	初	中
83	届く	Vi	中	中
84	届ける	Vt	初	中
85	留める	Vt	中	中
86	留まる	Vi	中	中
87	飛ばす	Vt	中	初
88	飛ぶ	Vi	初	初
89	取る	Vt	初	初
90	取れる	Vi	中	初
91	直す	Vt	初	初
92	直る	Vi	初	初
93	流す	Vt	中	中
94	流れる	Vi	中	中
95	無くす	Vt	初	初
96	無くなる	Vi	初	初
97	鳴らす	Vt	中	中
98	鳴る	Vi	初	中

23	返す	Vt	初	初
24	返る	Vi	中	初
25	変える	Vt	初	初
26	変わる	Vi	初	初
27	掛かる	Vi	初	初
28	掛ける	Vt	初	初
29	隠す	Vt	中	中
30	隠れる	Vi	中	中
31	重なる	Vi	中	中
32	重ねる	Vt	中	中
33	消える	Vi	初	初
34	消す	Vt	初	初
35	聞く	Vt	初	初
36	聞こえる	Vi	初	初
37	決まる	Vi	初	初
38	決める	Vt	初	初
39	切る	Vt	初	初
40	切れる	Vi	中	初
41	崩す	Vt	中	中
42	崩れる	Vi	中	中
43	加える	Vt	中	中
44	加わる	Vi	中	中
45	壊す	Vt	初	初
46	壊れる	Vi	初	初
47	下がる	Vi	初	初
48	下げる	Vt	初	初
49	閉まる	Vi	初	初
50	閉める	Vt	初	初
51	退く	Vi	中	中
52	退ける	Vt	中	中
53	過ぎる	Vi	初	中
54	過ごす	Vt	中	中
55	進む	Vi	初	初
56	進める	Vt	中	初
57	育つ	Vi	中	中
58	育てる	Vt	初	中

99	並ぶ	Vi	初	初
100	並べる	Vt	初	初
101	抜く	Vt	中	中
102	抜ける	Vi	中	中
103	残す	Vt	中	初
104	残る	Vi	初	初
105	乗せる	Vt	中	初
106	乗る	Vi	初	初
107	覗く	Vt	中	中
108	覗く	Vt	中	中
109	伸ばす	Vt	中	中
110	伸びる	Vi	中	中
111	始まる	Vi	初	初
112	始める	Vt	初	初
113	外す	Vt	中	中
114	外れる	Vi	中	中
115	離す	Vt	中	中
116	離れる	Vi	中	中
117	広がる	Vi	中	中
118	広げる	Vt	中	中
119	増える	Vi	初	初
120	増やす	Vt	中	初
121	ぶつかる	Vi	中	中
122	ぶつける	Vt	中	中
123	減らす	Vt	中	中
124	減る	Vi	中	中
125	混じる	Vi	中	中
126	混ぜる	Vt	中	中
127	纏まる	Vi	中	中
128	纏める	Vt	中	中
129	回す	Vt	中	中
130	回る	Vi	初	中
131	見える	Vi	初	初
132	見る	Vt	初	初
133	見付かる	Vi	初	初
134	見付ける	Vt	初	初

59	揃う	Vi	中	中
60	揃える	Vt	中	中
61	倒す	Vt	中	中
62	倒れる	Vi	初	中
63	出す	Vt	初	初
64	出る	Vi	初	初
65	助かる	Vi	中	中
66	助ける	Vt	中	中
67	立つ	Vi	初	初
68	立てる	Vt	初	初
69	点く	Vi	初	初
70	点ける	Vt	初	初
71	付く	Vi	中	中
72	付ける	Vt	初	中
73	伝える	Vt	初	中
74	伝わる	Vi	中	中
75	続く	Vi	初	初
76	続ける	Vt	初	初

135	向く	Vi	中	中
136	向ける	Vt	中	中
137	戻す	Vt	中	中
138	戻る	Vi	初	中
139	焼く	Vt	初	初
140	焼ける	Vi	初	初
141	止む	Vi	初	初
142	止める	Vt	初	初
143	寄せる	Vi/Vt	中	中
144	寄る	Vi	初	中
145	沸かす	Vt	初	初
146	沸く	Vi	初	初
147	分かれる	Vi	中	中
148	分ける	Vt	中	中
149	渡す	Vt	初	初
150	渡る	Vi/Vt	初	初
151	割る	Vt	中	初
152	割れる	Vi	初	初